



往還通信

第131号

R8.4.11発刊

ホームページ <https://miekenjukai.com>

E-mail oukan@ccnetmie.ne.jp



社会福祉法人 三重健寿会

特別養護老人ホーム 往還

〒510-8103 三重県三重郡朝日町大字柳字熊之田554番地

Tel (059)377-6011 Fax (059)377-6001



新年度を迎えて



施設長 柿澤佳世子

理事長が育てた河津桜やおうかん桜（大寒桜）、アーモンドも咲き終わり、ソメイヨシノが満開を迎えています。春のあたたかい日差しの中、黄色い蝶を猫たちが追いかけています。

平成18年（2006）6月に開所した往還は、今年の6月16日に20周年を迎えます。

これまでご縁をいただきました皆様のおかげで今がある事を、深く感謝申し上げます。

この20年、皆さまのお力をお借りしながら進んできました。らせん階段を登るように参りましたが、振り返れば、良い方向に進んでいます。そしてこの間（かん）、多くの皆様のお見送りをさせていただきました。印象に残ったお別れがいくつかあります。

北島三郎の「ま～つりだ、祭りだ、祭りだ・・・」の歌声や賑やかなお囃子の中でのお別れ。亡くなられた事は寂しい事ですが、まるで、御祝い事の様な雰囲気の中、笑顔でお別れをするご家族様のお顔は皆晴れやかでした。別の方のお話ですが、60歳を超えてから車の免許を取り、軽トラでお世話になった方に野菜を届けていた事など、私たちの知るお姿からは想像できないエピソードを聞かせていただきました。

最近は家族葬をされる方が増え、お見送りをさせていただく機会が少なくなりました。

以前、お別れの様子を知人に話した時に「まるで卒園式で見送る先生の様だね」と言われた事がありました。ご利用者のお顔は皆輝いており、微笑みすら浮かべていらっしやいます。人生を終えた最期を見届け見送る。確かに、卒業式かも知れません。お一人お一人のこれまでの人生があります。介護の仕事は、みえない徳を積む素晴らしい仕事だと思います。100人のご利用者様がいれば、その方たちの後ろには、それ以上のご家族様のお気持ちがある。見送られたご家族様のお顔が清々しくすっきりしたお顔であれば、「本当に良くしていただいた」「〇〇の人生は、幸せでした。まさに至れり尽くせりでした。」という言葉にあたたかいお気持ちをいただいたと感じます。介護処遇改善加算等という底上げ対応も必要ですが、この仕事の奥深さ、重み、尊さを、ご家族様、職員、そしていずれは誰もが自分事となる、すべての人が想像できる未来になる事を祈ります。

先日、朝日町のイベントに、ご利用者様が参加する機会がありました。「何を着ていこう」「どの帽子をかぶろう」とお出かけにウキウキされるご利用者様の様子を見て、そんなに喜んで下さるならまた連れて行ってあげたい。ご利用者様の状態、状況に合わせ、今できる事をしております。ご家族様が外出の機会を作って下さる事もあります。迎えに来られたご家族様を見て「ああ嬉しっ！」と満面の笑顔、明るい響き渡る声を聞いた職員は、思わずにっこりします。ご利用者様の喜ぶ、幸せそうな姿を見て、職員も良かった！また喜ぶ顔が見たい！となり、その話を聞いて、ご家族様もここなら安心と喜んでいただく、喜びの連鎖を作りましょう。

ご利用者、ご家族、職員、施設、すべて良し！を目指し続けます。



節分レクリエーション



節分の日には鬼のお面を利用した的当てゲームをしました。新聞紙で紙ボールを作り、利用者様が鬼を目がけて投げました。鬼は外！といいながら当たると大喜びでいつもとは違ういい笑顔が見られました。大バズリで中々順番を代わってもらえず時間を要したため、結局人数をわけて二日続けてすることになりました。皆様にいい時間を過ごして頂きました。

桜ユニットリーダー 山原



ひな祭り



「お雛様」「お内裏様」対抗、玉入れゲームで体を動かした後、樹脂製のお茶碗と茶筌を使い点てられた抹茶ラテをお召し上がり頂きました。神妙な面持ちの方も甘い抹茶の香りが立つと表情も緩み多くの笑顔が見られたことを嬉しく思いました。

藤ユニットリーダー 小川



お花見



河津桜が咲き始め外気浴を兼ねお散歩に行きました。まだ蕾が目立ちましたが「これからもっと綺麗に咲くね」と満開になる河津桜を思い浮かべながら会話に花を咲かせてみえました。

花水木サブリーダー 服部 貴大





職員研修



1月「認知症と認知症の介護」 1/8 (木)

基本的な認知症状の特徴を確認したり、利用者側の視点



(感じていること・自信喪失・歯がゆさ・介護拒否の背景など)と介護する側が心がけること、グループワークを取り組みました。

2月

「往還での看取りに関する職員教育」 2/19 (木)

外部研修動画を視聴し、看取りケアのプロセスと考え方について理解してもらい、そのうえで自分自身の死生観を知るワークに取り組み、グループワークにて発表し合いお互いの想いを共有する機会を持ちました。



3月

「身体拘束適正化のための研修」 3/12 (木)

拘束の具体的な行為や拘束による弊害を講師と動画視聴で理解を深め、グループワークにて日頃の関わり方についてより適切な手段を振り返りました。



チェアヨガ



佐藤美香先生

皆さんとヨガを一緒にさせて頂くのが楽しみです。



今年の1月から、「Yoga Flower」の佐藤美香先生に月に一回来てもらい、椅子で座って出来るヨガを利用者様と一緒にしてもらおう事となりました。

イスや車イスに座ったまま行うため、高齢者の方でも安心して運動ができます。最初、お試しで先生に来てもらった時に20分間やっていただいたのですが、ヨガは呼吸法をしながらゆっくりの動きで行うので、時間が短くて張り合いがなかったというお元気な利用者様の声が何名かありました。そのため、利用者様のレベルに合わせて、初心者コース(20分)と上級者コース(40分)に分かれて参加していただく事となりました。先生も最後まで皆さん、集中してやってくださるのでございますと思いますとおっしゃっていました。皆さん、楽しみながら体を動かしています。



4月末、母（つた江）の50回忌法事を行う。母の法要法事はこれで最後である。生前、祖母（ふじ）の50回忌法事の時、母が「これで最後」と言っていた。

母は4歳の時、母親を結核にて亡くした。当時は抗生物質もなく不治の病であった。2歳下の妹と、寝込んでいる母親のもとへ近づこうとすると「伝染するから来るな」と言われた。少女漫画にでも出てきそうである。桑名の女学校へ進み女医を目指していたが、父親（善左衛門）の急逝、家業の造り酒屋（朝明泉）の廃業が重なり、全寮制で給料を頂ける京都帝国大学病院付属看護学校へ進んだ。当時女性が入学できる医師養成学校は現在の東京女子医大と関西医大しかなく、私立は学費が昔も今も高額である。卒業後は産婆養成所でも学んだ。現在、京大で学び助産師資格を得るには医学部人間健康学科にて学び看護師資格取得後、大学院修士課程にて助産学系を専攻しなくてはならない。大学病院に勤務していたが、京大医療団として支那徐州へ派遣された。戦争が激しくなる前に任務終了し帰国した。故郷で産婆業をはじめ、職業軍人だった父（環）と結婚した。昭和19年保健婦制度が始まり、第1回試験に合格している。

戦後、産婆は助産婦制度へ移行し昭和27年助産婦資格を取得して助産所を開いた。出産入院者が多くなり仏間、座敷、居間まで産室入院室となり、家族には下部屋が唯一のスペースとなったこともあった。旧東海道（往還）寄りに産室があったが、当時は大型トラックが頻繁に通るうさく、旧東海道（往還）とは反対側建物を改造し産室を5部屋造った。私が中学生の頃にはその二階を私や姉が自室として使用していた。夜、試験勉強をしていると、下で産婦が呻きだす。初めの頃は驚き聞き耳を立てた。出産は個人差があり、スポッと簡単に産まれる方もいれば、叫び声を上げ必死に踏んばる方もいる。「ここ一番の時は出産とおなじでその時頑張らないといけないことがある」と教えられた。また逆に物事がうまく運ばないときは「難産だ」と例えていた。

小学生の頃、同級生に「赤ちゃんはどこから生まれるのか」よく質問された。母に尋ねると「お腹を切る」としか答えてくれない。小学生は幼くて可愛いなどと思っははいけない。知ってか知らずか、どぎつい話をしている、していた。小学生の頃、妹（さつき）と出産現場に入ろうしたら怒られ、妹だけに入った。後で妹に聞いたら「腹は切っていない」、「お尻の穴から出てきたのか」と聞くと妹は「うーんよくわからない」と答えた。現在小学校では「女性の下半身には穴が3個ある。おしっこの穴、うんこの穴、赤ちゃんが生まれてくる穴」と教えている。

助産所を一人で担うのは激務である。陣痛は昼夜を問わず、母子の状態も刻一刻と変化する。私たちが起きている昼間にも寝ていることが多かった。59歳で亡くなった。なぜ女医に成ろうとしたのか。4歳時の体験だろうか。姉（喜久子）には「女医に成れ」といつも言っていた。自分が叶わなかったことを子どもに託すことは良くあることである。且つ「おっよこちょいは外科医になるな。京大時代に外科手術で開復して中にはさみ（モスキート？）を置き忘れた例を何度も見ている」と。姉が名古屋市立大学医学部に受かった時、私は既に鈴鹿高専に合格し、10日間ほどプラモデルを作る日々を過ごしていた。突如「お前も医者に成れ」と言われ、特に電気工学科に固守する理由もないので一週間ほど受験勉強を再開し普通科高校へ行くことになった。私が大学受験の頃、日本で一ヶ所、朝日町は歯科学会が推奨する虫歯予防のため上水道にフッ素添加をしていた。韓国から視察団が来る状態で、責任者が父の従弟で当時町長の佐藤金一氏だった。「朝日に歯科医がないので歯科を目指せ」と言われた。しかし現在この事業への評価は下っている。私が歯科を開業した頃、数人の患者から「前の歯医者で朝日の人は歯が汚いので直ぐわかると言われた」「朝日町は水が悪い」との話を聞いた。班状歯（歯牙フッ素症）である。途中、防衛大学校や海上保安大学校を受験したので母は気が気でなかったかと思う。

〈次ページへ続く〉